

自由が欲しい！早期退職後に 選んだ仕事は“能面師”

10年後に気づいた先祖とのかかわり

シニアライフアドバイザー 松本すみこ

津波と原発事故で 消えた実家

荒嶋昌二郎さん（70歳）の故郷は福島県浪江町。海岸から700メートルほどのところにあつた家は、2011年の東日本大震災の津波で流されてしまった。ただ、荒嶋自身は津波や原発事故には遭っていない。親も震災前に亡くなっていった。親が震災に遭遇していたらと思うと、ぞっとする。

荒嶋さんは18歳で南相馬の小高工業高校を出て、東京の製薬会社に勤めた。40歳くらいから、「子供



第5代左右衛門の荒嶋昌二郎さん

が働くようになったら、俺の仕事はもう終わりだから、好きなことをさせてくれ」と言っていたそうだ。50歳になったら早期退職すると宣言し、家も早めに建てていった。それでも、奥さんは、まさか本当に辞めるとは思っていなかった。「たぶん、私に言う前に、退職願を出したんじゃないかな」。しかし、そのことでもめることはなかった。何でも一所懸命で、やり始めたなら一直線。そういう夫の性格をよく知っていたからだ。

退職後は浪江町に戻り、農家を継いだ。4年ばかりで甥に譲り、東京に戻ってきた。その4、5年後に、東日本大震災と原発事故が起きる。甥の家族も避難し、代々続いた実家の農家は今や跡形もない。たまに墓参で帰る程度だ。

代々続いた農家には古文書があった。30歳のとき、父親からその古文書を託され、読み解こうとした。夜中まで首つ引きで取り組ん

近頃のカルチャーセンターでは、日本の伝統工芸を教える講座が人気だ。能面づくりもそのひとつ。東京都足立区の荒嶋昌二郎さんは50代半ばから教え始め、今ではカルチャーセンターに自身の講座を持つ。実は、荒嶋自身もカルチャーセンターで能面づくりに出会い、熱心に学んだひとりだ。そして、ある日、自分が能面にのめり込むわけを、先祖に関わる文献から知ることになる。

だが、古文書は難しい。家系図だけはなんとか起こし、どうやら宮大工の家系で、自分は39代目だということになった。

そして、「左右衛門」という名前を背負った祖先が明治維新まで5代いるということも知った。この名前はなんだろうなと思うくらいで疲れてしまい、以来、古文書は手つかずのまま。この古文書の系図と結びつく情報もたらされるのは、ずっと後、60歳を超えてからのことである。

48歳で能面に取り組み、 6年で独立

能面づくりを始めたのは48歳、退職する2年前だ。*篆刻を習いた



荒嶋さん初めての作品



能面の裏。漆が塗ってある

行ったが、教えていたのは初歩的な木の篆刻。それは必要ないなあと思いつつ横を見たら、能面教室が開かれていた。面白そうだと申し込んだが、すでに定員いっぱい。空きができたということ、帰ってきた。

それが1995年の阪神淡路大震災の年。すぐにカルチャーセンターから電話が来て、能面講座の空きができましたと言う。震災のためキャンセルが出たのだ。しばらくは無理と覚悟していた講座にすんなりと通えることになり、能面づくりの修業が始まった。

田舎にいたときも土日には東京に帰ってきて教室に通った。そし

*篆刻(てんこく)：木・石などに印を彫ること